

中学生の部

【社会を明るくする運動可児地区推進委員会 会長賞（可児市長賞）】

可児市立東可児中学校 3年 小川 紗季（おがわ さき）

「私が生きる意味」

もし、自分が何のために生きているのか、わからなくなった人がいたら、こんな言葉をかけてみたらどうだろうか。

「あなたは社会に必要な人間だよ。」

これはかつて私が先生からかけてもらった言葉だ。これは私が小学校高学年の時の話だ。

その頃の私は（今でもそうだが）内気で陰気な性格だった。友達も少なく、運動も勉強も全くできなかった。その頃は本当に自分が何のために生きているのか、このまま生きてなにをなし得るのか、まるでわからなかった。

自分でも『いてもいなくてもいい存在』だと思っていた。先生からもあまり褒められることもなく、むしろほとんど相手にしてもらえなかったような気がする。

だから、その日の先生との個人面接はとても憂鬱で、暗い気持ちで教室に入っていた。

「何か困ったことはない？先生に相談したいことはないかな？」

先生は、定型文のような質問をした。

「ありません。」

と、私はうつむいたまま返事をした。

次に先生は書類を出した。

「これはこの間授業でやった『あなたの良さは何か』だけど……」

私はますます憂鬱になった。それは『自分の良さは何か』を、クラスの子に書いてもらったものだ。私もみんなに書いた。それを表のようなものに貼る。自分で貼ったのだから結果はわかっている。私はほとんどの子から、『おとなしい子』と思われるていた。

私はきつと叱られるだろうと思った。が、先生は意外なことを言った。

「紗季さんこれってす『いいよ。』おとなしい子』が一番多くて、その次が『優しい子』だよ、『話を聞いてくれる子』っていうのも何枚かあるよ。これってとても素敵なんだよ。控えめで、優しく話を聞いてくれる人って、すごく社会に必要な人だと

思うよ。だってみんなが自分のことばかり話していたら、世界中が全然まとまらなくなるもん。主張したい人もいれば、話を聞いてくれる人もいる。これはとっても大切なことだよ。おとなしくて優しいのはあなたの立派な長所だよ。」
と言った。

自分のことを肯定されたことのない私は、多分ぼかんとしていたと思う。
そして先生は続けた。

「先生は数か月あなたと一緒にいて、あなたが魅力的な子だと分かった。でもそれを先生と一部の子しか知らないなんてもったいないよ。だからもう少しだけ自分はこのいう人間なんだとみんなに主張してごらん。そうしたらあなたの魅力に気づいてくれる人がいっぱい増えるよ。」

(私が社会に必要?) ぼんやりして教室を出たような気がする。自分がいることで誰かのためになるなんて思ったこともなかった。

ただ自分が生きていることにまったく意味がないと思っていた私は、もしかしたら何か出来るかもしれないという考え方に変わった。

悲しんでいる人がいれば、上手な言葉はかけてあげられないけど、寄り添ってあげることが出来る。悩み事を解決する方法はわからないけど、思いのたけを聞くことなら出来る。そんな風に思うようになった。

そうしたら、いろんな人がみんな社会に必要な人だと思えるようになった。笑顔でひとを幸せにしてくれる人、みんなをやる気にさせてくれる人、自分の事のように心配してくれる人、叱ってくれる人、笑わせてくれる人、みんな社会に必要な人だ。

もし誰かが罪を犯したとする。それを認めて過ちを償おうと努力する。その努力を沢山の人が認めるだろう。だからその人も社会に必要な人だ。もし家の中から出られない人がいるとしても、それを心配してくれる家族がいて、その人が家族のことを思いやれる気持ちがあれば十分社会に必要な人だ。

みんな誰かの役に立っている。多分気づかないのは本人だけだ。

私はあの時、担任の先生に教えてもらえなければ、自分は今でも世の中に不要な人間と生きていただろう。私のほんのわずかないところを褒めてくれた先生には本当に感謝している。そして、私は中学生になり、先生が言った通り少しだけ自分のことを主張するようになった。私はアニメが好きだと人に話すようになったのだ。引く人も何人かいたが、共感してくれる人が周りにいっぱいできた。人の悩みを聞くことも多くなったし、部活で県大会に行けなかったとき、仲間と共に悲しみ、泣いている友のそばにずっと寄り添えた。

この世界にはいろんな人がいる。自分には合わないと思える人も沢山いるだろう。だが、その人が社会的に役立っているところを見つけてあげる、私はそんな人間になりたい。

【可児市保護区保護司会 会長賞】

可児市立蘇南中学校 3年 西川 沙良（にしかわ さら）

「祖父の素顔」

私には、愛知県に住む祖父と祖母がいる。私は祖父が苦手だった。自分の趣味の事しか考えず、自分勝手だからだ。祖母や孫の事なんて興味がないだろう。そう思っていた。あの時まで。

平成二十八年、祖母はパーキンソン病になった。パーキンソン病により祖母は動きが素早くできなくなったり、手足が震えるようになった。祖父はこの病気について細かく調べ、祖母の症状を観察した。祖父のおかげでこの病気が分かったのである。病気になる弱っていく祖母を祖父はサポートし続けている。祖父は、医者から聞いた事をメモし、日々の生活や食事に生かしている。入院している際には衣類を届け、全ての家事を行った。「大切な人の為に自分にできることを全てしよう」という強い思いがあったのだろう。

去年の正月、私の家族は祖父母の家に行った。祖母は病気の療養中だった為、苦しかったし辛かったと思う。しかし、祖母は辛さを見せず、今まで通り笑顔で私に接してくれた。孫達に心配をかけたくなかったのだろう。私は、自分が苦しい状況にいても優しさと愛情を大切にする祖母を誇りに思う。私が祖母の病気を治してあげることができない。しかし、大切な祖母の為に私にもできる事はある。まずは、笑顔で接する事だ。「笑顔」には人の心を温かくする力があると思う。私が笑顔で接する事で、祖母はプラスな気持ちになり前向きに生きることができるとは思えないか。

私にはもう一つ祖父を見直した出来事がある。祖父の苺畑に泥棒が入ったのだ。祖父は苺を栽培していて、毎年五月になると苺を送ってくれる。しかし、その年はとても少ない量の苺しか送られてこなかった。その事を母が祖父に聞くと「夜の間に泥棒に苺を取られてしまった。孫達にたくさん食べさせてあげられなくてすまん。」と言ったらしい。また、苺畑の看板に「孫に食べさせたいので苺を取らないで下さい。」と書いたそうだ。自分の事しか考えていないと思っていた祖父が孫の事を大切に思っているのと知り、私は嬉しかった。祖母が病気になるったり、苺が盗まれるなど悲しい出来事が起こってしまったが、私は祖父の良さに気付くことができた。

これらの事から、社会を明るくするためには二つの事が必要だと思った。一つ目、

自分にできる事は何か考えて行動すること。あなたの行動により誰かが前向きに明るく生きる第一歩になるかもしれない。自分の行動で人の役に立てるのは素晴らしい事ではないか。逆にあなたの軽率な行動のせいで、誰かが一生苦しんだり傷つく場合だってある。だからこそ、犯罪や非行といった卑劣で、他の人の人生を奪う行為なんて絶対にあってはならない。あなたの行動一つで人の人生は変わってしまうのだから。二つ目、あなたの事を大切に思ってくれる人の為に一生懸命生きること。祖母みたいに病氣と戦いながら今を一生懸命生きている人がいる。自殺して自分の命を無駄にしたり、ましてや関係のない人を巻き込み、殺害する事は誰もが心を痛めることである。私は皆に訴えたい。絶対に人を傷つけてはならないことを。

私は命ある限り、精一杯生きようと思う。病氣と戦いながら懸命に生きる祖母のように。大切な人を支え続ける祖父のように。そして、明るい未来の為に。

【可児地区更生保護女性の会 会長賞】

可児市立西可児中学校 1年 白木 結士郎（しらき ゆいしろう）

「笑顔」と「会話」

近ごろは、親子の対話や地域の人との関わりが減っているとか、テレビで言っていたのを聞いたことがあります。ぼくは年齢的には反抗期真ったなかで、親に少しだけそのような態度をとってしまうことがあるけれど、今のところは親とも妹とも毎日笑い合って、会話も多い方だと思います。

祖父母とも、毎日顔を合わせ、会話します。例えば祖父母からは、

「今日は暑かったね。」

「今日は雨がひどかったけど大丈夫だった?。」

「学校は楽しい?。」

等と毎日声をかけてもらい、ぼくのことを気にしてくれています。ぼくのことを心配してくれる祖父母にはとても感謝しています。

ぼくは地域のクラブ活動に参加しています。様々な年齢の人たちと卓球をしています。

「元気?。」

「上手くなったね。」

等と、おじさんやおばさんが笑顔で声をかけてくれたり、ほめてくれたりします。ぼくは声をかけられたらうれしい気持ちになるので、

「ありがとう。」

「おつかれ様です。」

と応えます。ぼくはこのクラブ活動での交流が気に入っているので、続けていきたいと思っています。

ぼくは毎日、仲の良い友達と話しながら登下校しています。くだらない話だけれど、とても楽しいです。例えば雨の朝は、気分が沈むけど、友達と合流すると、みんなの笑顔や声に心が晴れてくるのです。そしてぼくも笑顔になるのです。だからぼくにとても大事な会話で、楽しい時間なのです。そんな友達にぼくも、笑顔を届けられたらと思います。

そして学校では、担任の先生とも会話することができています。小学生のころのぼ

くは先生と会話することがほとんどありませんでした。しかし、中学校では担任の先生が明るく話しやすそうに感じたので、ぼくのことを知ってもらいたいと思い、勇気を出して話しかけてみました。それから先生と話せるようになりました。ぼくのことを知ってもらえてとてもうれいす。なので今、先生との会話、関わりがとても楽しいです。

他にも、

「大きくなったね。」

「お母さんの背を抜かしたんじゃない?。」

「もう中学生なの。早いね。」

と声をかけてくれる近所の人だったり、普段あまり考えないし、気付かないけれど、たくさん優しい人がぼくのことを知ってくれていて、気にかけてくれたり、笑顔をくれたり、元気をくれたりしてくれているんだなと思いました。おかげさだけれど、ぼくの名前の「結」の字は、そんな優しい人たちとぼくをつなげてくれているような気がします。両親も、なかなか良い名前をつけてくれたと思います。

家族はもちろん、友達、先生、近所の人、地域の人、たくさん色んな世代の人との会話や関わり、つながりを持つと、毎日を明るくおだやかに過ごせるような気がします。

【審査員特別賞】

可児市立西可児中学校 2年 仲澤 早絢（なかがわ さあや）

『たばこ』

「スーツ。ハー。」外出すると、いろいろな所でたばこを吸っている人がいる。その近くを通るたびに煙の嫌なニオイがする。私の父もそうだ。一日に何度も庭に出て、たばこを吸う。私は、それが大嫌いだ。

たばこには、有害な物質がたくさん含まれている。吸えば吸うほど肺がボロボロになる。小学校の保健の授業で見たあの真っ黒な肺の写真が今でも忘れられない。父の肺がそんな真っ黒なのかと想像すると、今すぐにでもやめてほしい。父は二十歳の頃から約二十年間たばこを吸っていると聞いた。何度かやめようと思ったことはあったみたいだが、結局やめられていない。どうしてやめられないのか、どうしてたばこを吸ってしまうのか、父に聞いてみた。

「別にたばこを吸おうと思って吸っているわけじゃないなあ。」想像していたよりあっさりとした答えでびっくりした。最初は大人への仲間入りしたい気持ちだったり、単なる憧れから始まったのかも知れないとも言っていた。父も私と同じようにたばこを吸って真っ黒になった肺の写真を見たことがあるらしい。なのに、なぜあんなにあっさりとした答えだったのか。

そうか。考えて行動をしていないということは、たばこを吸うことが「習慣」になっってしまったのだ。帰ったら手を洗ったり、食後に歯をみがく様に父にとってそんな習慣の一つにたばこを吸うということがあるのだと思った。母に聞くと、たばこの歴史は相当古いそうだ。そんな古くから吸われているたばこにはどんな効果があるのか。人間の習慣にさせてしまったたばこの力はとても怖い。父はリラックスできるし、いつでもやめようと思えばやめられると言っていたけれど、歴史が古く、強い力を持っているたばこには勝てないと正直思う。

あの真っ黒な肺が頭から離れないからこそ、父には一刻も早くたばこをやめてほしいと思っている。たばこに含まれているニコチンには麻薬のような作用があると聞いた。それもまた怖い。

今、父は元気でやりたい事もたくさんできる体だけれど、知らないうちに、気付かないうちに少しずつ有害な物質が体に染み込んでいっているかもしれない。父が苦し

んでいる姿を見たくない。いくら吸う人の立場や思いに寄り添おうと考えてみても、やっぱり想像できなかった。

そこで私は3つの方法を考えてみた。

一つ目は、たばこの値上げだ。たばこの値上げをすることで、たばこを買う人が減ると思ったからだ。

二つ目は、たばこについての情報をもっと発信することだ。たばこが体にどれだけ悪いのか知ること、たばこをやめる人が増えると思ったからだ。

三つめは、たばこではない別の方法で、リラクセスしたり、ストレスを減らすことだ。運動してみたり、家族や友人と出かけたりしてみるといいと思う。

今、たばこが吸える場所ほとんどなくなって、吸っている人が片身がせまく感じることも増えていると父が言っている。海外では吸える場所を探すことが大変とも言っていた。ということは、東京オリンピックもせまってきている日本だからこそ、さすが日本は空気がキレイで過ごしやすいと思ってもらえる様な活動があってもいいと思う。もちろん基本は健康で楽しく毎日を過ごすためにやめてほしい気持ちだけでなく、オリンピックのような大きなイベントに乗っかり、国レベルで大きな活動を進めるのもありだと思う。自分の意志の強さや周りの協力も必要かと思うので、まずは身近な父からサポートをしてたばこをやめさせていきたい。

たばこの匂いがする父ではなく、優しい匂いがする父になってほしいから…。